

# 会談の影響は「両刃の剣」

松田康博・東大東洋文化研究所教授

## 考論

台湾総統選が来年1月に迫ったこの時期に中台が首脳会談に動いた背景には、国民党のあまりの劣勢がある。中国の習近平主席は国民党に助け舟を出すことで同党の大敗を回避し、台湾への影響力を保持したい考えだろう。任期満了が迫る

台湾の馬英九総統は、会談を自らの歴史的な「遺産」とすることもできる。

一方、総統選を有利に進める民進党には大きなプレッシャーだ。候補の蔡英文氏は中台関係の「現状維持」を主張するが、中台が首脳会談を行うほど密な関係になれば、維持する「現状」のハードルは大きく上がる。今後、蔡氏が対応を

迫られるのは確実だ。

ただし、会談の影響は「両刃の剣」でもある。中国は1996年、台湾近海にミサイルを撃ち込み、国力を見せつけることで、中国と距離を置く李登輝氏の支持を下げようとした。しかし、結果は李氏の得票を押し上げ、全くの逆効果になった。

習主席は国民党の支持回復を狙っているのだろうが、実現するかどうかは不透明と言わざるを得ない。一つ言えるのは、この会談後、台湾住民の総統選に対する動向に大きな変化が出てくるということだ。